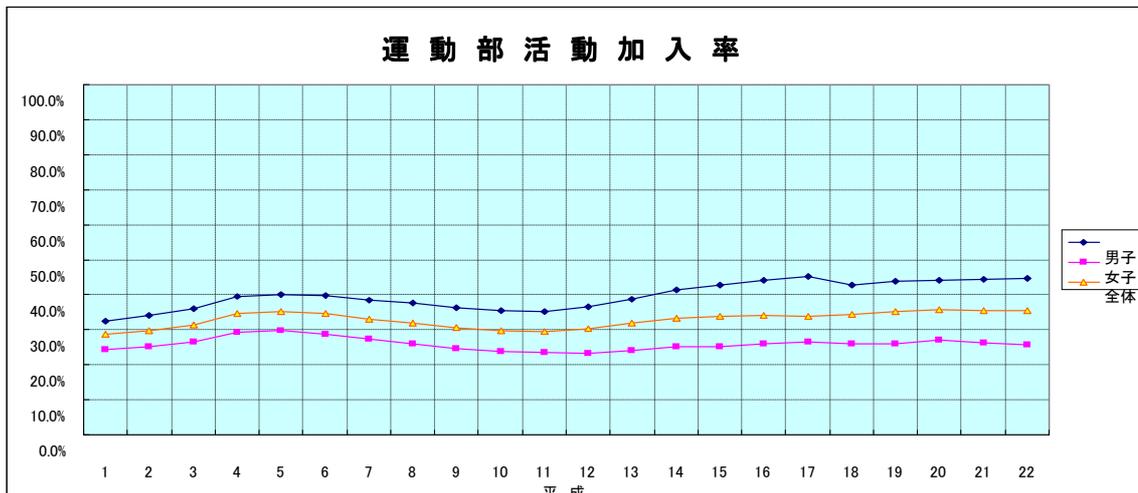


1 はじめに

千葉県高等学校体育連盟は昭和23年に発足し、「高等学校の体育を振興し、生徒の体力向上とスポーツ精神の涵養」を目的として、今日まで活動してまいりました。この間、多くの先輩や先生方のご努力により支えられた運動部活動が、その目的達成に大きな役割を果たすとともに、千葉県体育・スポーツの発展の大きな原動力となっております。



県内の運動部活動加入状況ですが、千葉県でも少子化の影響で生徒数は減少傾向にありましたが、一方、部活動加入率はほぼ横ばい状態であり、部活動に期待する生徒が多いことが分かります。

さて、本研究部は千葉県高等学校体育連盟35専門部の一つの専門部という位置づけにあり、各専門部から研究担当者を推薦していただき、年3回の研究担当者会議を開催し、競技力向上、安全対策、普及振興、基本問題の4班編成で各専門部に共通する課題や専門部の活動で特筆できるものなどについて分担を決め調査研究活動を展開しております。その成果を毎年2月に行う千葉県高等学校体育連盟研究大会で発表し、機関紙「研友」を通じて現場にフィードバックし、部活動経営に生かしていただけるよう努力しております。

2 研究の契機

千葉県では2007(平成19)年7月に自転車競技部員の列が、路上駐車の上乗車に衝突。部員のうち二人が頭などを強く打って死亡する痛ましい事故が起きました。通常は顧問教諭が車で並走していますが、この日は午後から職員会議があったため、部員だけの練習になったといえます。

この事故が教育界に与えた衝撃は大きいものでした。

「高体連として何かできないか。」その思いをもとに本研究はスタートしました。

全国研究大会において発表された「運動部活動顧問のための安全対策マニュアル」(平成14年 北海道)や「顧問支援ハンドブック」(平成21年 宮崎県)、そして平成20年にだされた「部活動中の重大事故防止のためのガイドライン～ 日常の活動に潜む危険を予見し回避するための安全対策～」(東京都)が大きな参考となり、研究への取り組みや発刊へ向けての意欲に拍車をかけてくれました。

3 研究の目的

県内の高等学校における顧問の専門性は次表のとおりです。約30%の顧問が「競技経験がなく、技術指導は不可能」と回答しており、3人に1人は技術指導ができないことを示しています。

【高等学校運動部顧問の専門性】

内 容	平成22年度	平成23年度
競技経験があり、専門的で高度な技術指導が可能	24.8%	26.7%
競技経験があり、技術指導が可能	21.0%	21.8%
競技経験はないが、多少の技術指導が可能	21.7%	21.9%
競技経験がなく、技術指導は不可能	29.5%	29.3%

(千葉県高等学校体育連盟の活動状況調査より)

また、部活動経営上・指導上の課題を顧問に問うたところ、以下のような結果となりました。

【部活動経営上・指導上の課題】

	平成22年度	平成23年度
部員数確保に関する課題	54.9%	55.8%
活動する施設や競技用具に関する課題	43.6%	43.0%
専門的な技術指導に関する課題	29.3%	28.4%
部費の使途や管理など活動経費に関する課題	11.5%	11.3%
休日の活動や引率業務に関する課題	24.1%	22.4%
けがや事故対応といった安全管理に関する課題	24.8%	22.2%
部員間や顧問間の人間関係に関する課題	9.6%	7.6%
他の分掌との兼ね合いに関する課題	22.4%	21.5%
高体連や競技団体等の外部組織に関する課題	5.7%	5.0%
その他	1.9%	2.3%

(千葉県高等学校体育連盟の活動状況調査より)

顧問は部員数確保や施設の問題とともに休日の活動や他の校務との兼ね合いを課題に挙げています。

つまり、県内の運動部顧問の現状は「専門外の顧問」「他の校務との兼ね合い」という二つの大きな課題を抱えていると考えられます。このことは部員側から見ると、「顧問に専門的な指導を得ることが難しいことがある」「顧問が不在の中、活動することがある。」ということになります。

充実した部活動のためには、怪我や故障がないことが大前提となります。「これぐらいは分かるだろう。」と思っていると、事故につながる可能性があります。

本県研究部は、再び悲劇を繰り返さないために、たとえ専門外の顧問を任されたとしても良好に部活動運営が行われるよう、安全面を中心に日々の練習活動や大会引率時等に配慮すべき事項をまとめ、顧問の「手引き」となる情報を一冊にまとめようと本研究に着手しました。

4 調査研究の方法と研究結果

調査期間：平成21年6月～平成22年9月（回答への訂正・追加・削除含む）

調査対象：千葉県高等学校体育連盟全専門部

調査内容：状況別に起こりうる事故とその予防策

調査項目：「部活動での各活動時間帯における、一般的な事故事例や起こりうる事故は具体的にどの様

なものがありますか。また、その事故を防ぐ対処方法（予防策）にはどのようなものがありますか。」

状況①：用具準備・片付けの際

- a 日常的な安全管理にかかわる場合（危険物の有無，不要な用具の放置等）
- b 施設・設備・用具・器具の不備にかかわる場合
- c 他団体との施設競合にかかわる場合
- d 天候等自然条件にかかわる場合
- e その他

状況②：アップ・基本練習・応用練習・ダウンの際

- a 部員の健康状況への配慮にかかわる場合
- b 部員の体力・技能への配慮にかかわる場合
- c 種目の特性上起きうる場合
- d その他

状況③：通常の練習場所が確保できない場合

- a 交通環境にかかわる場合
- b 天候等自然条件にかかわる場合
- c その他

状況④：日常の活動場所以外（大会・練習試合・合宿等）での活動の場合

- a 交通環境にかかわる場合
- b 天候等自然条件にかかわる場合
- c 移動にかかわる場合
- d 施設・設備・用器具の不備にかかわる場合
- e 他団体との施設競合にかかわる場合
- f その他

熱中症対策

調査結果：（一部）

①用具準備・片付け

a 日常的な安全管理にかかわる場合（危険物の有無，不要な用具の放置等）

競技	事故事例	予防策
ソフトボール	バッティングマシンの準備片付け中，重いのでマシンが転倒。	安定した場所を選び，しっかり固定する。
	バッティングマシンを固定せず使用，マシンがずれボールが打者を直撃。	安定した場所を選び，しっかり固定する。
	石灰をラインカーの中に入れるときに石灰の粉が目にはいる。	風の向きを考え，ゆっくり入れる。ゴーグルをする。
	素振りのバットが近くにいる者に当たる。	危険性を徹底指導。

① 用具準備・片付け

b 施設・設備・用具・器具の不備にかかわる場合

バドミントン	清掃不良や、汗で濡れる等して、滑りやすくなった床で転倒や捻挫等を起こす。	コートは使用前・後に必ずモップがけ、雑巾がけをおこなう。また、汗等で濡れた場合は、試合中等であっても中断して、直ちにモップや雑巾で拭き取る。
	コート内にあるバレーボール等の他競技の支柱設置用の穴の蓋金具等が破損して足を引きかける。	破損等がないように整備を行う。必要ならば、コートテープ等でその部分を覆う。
	他競技で貼ったコートテープ等に足を引っかける。	不要なコートテープ等は剥がす。残った糊も除去する。
	コートそばにタオルやウエア等が放置しており、それを踏んで滑って転倒する。	タオルやウエア等はコートから十分離れたところに整頓して置く。

②アップ・基本練習・応用練習・ダウン

c 種目の特性上起きうる場合

バレーボール	ブロッキングやスパイクの着地時にバランスを崩して、相手コートに足を踏み込み、相手の足の上に乗る足首を捻挫骨折する。	ネット際及び接触プレーの危険性を理解し、無理なプレーを禁止する。
	スパイク練習中、ボールの上に着地して転倒し、足首を捻挫する。	ボールがコート内に散乱していないか、常に注意を払う。
	パス、トス、ブロック時の手の指の突き指、脱臼、骨折。	テーピングによる予防。
	レシーブやフライングレシーブ時に、肘や膝を床に強打して打撲する。	正しいフォームの指導。サポーターの使用。
	汗などで床が濡れたことにより、滑り転倒。	見つけたら直ぐにモップやタオルで拭く。
	選手同士の接触による打撲や捻挫。	互いに声をかけあう。指示の声をさせせる。
	ネット際での捻挫。	接触プレーの危険性を理解し、相手を損傷させるプレーを禁止する。
	相手との接触による捻挫、突き指等。	サポーター、テーピングによる予防。接触プレーの危険性を理解させる。
	ブロック時の手の指の骨折、脱臼。	テーピングによる予防。正しいフォーム。
	ブロック、スパイクの着地時の足首捻挫骨折。	正しいフォームで着地（膝を曲げながら両足着地）。サポーターの使用。 ジャンプする際、流れないようにするために深い踏み込みや大きなステップ、ステップを統一する指導。

		着地の際、足に乗ってしまったときの身体の逃がし方の指導。
		ネット近くでの危険性の注意を普段から行う。

併せて、本研究部安全対策班が今まで研究を重ねてきたものを内容に盛り込もうと掲載内容の精査検討に入りました。県高体連のご指導も受け、運動部顧問として基本的に知っておくべき以下の事項を総論として冒頭に掲載しました。

「運動部活動の意義とその現状」

- (1) 運動部活動の意義
- (2) 中学校・高等学校時代の運動部活動経験と体力・運動能力との関連
- (3) 千葉県の運動部活動の現状

「安全で充実した運動部活動のために」

- (1) 学校全体で取り組む運動部活動
- (2) 顧問の役割
- (3) 指導上の基本方針
- (4) 活動計画作成上の留意点
- (5) 保護者との連携
- (6) 事故防止
- (7) 事故の対応
- (8) 安全管理と法律的責任

次に、前述したメインとなる部分を掲載しています。

- 「活動状況による事故事例と予防策（競技種目別）」
- 「千葉県内高校部活動における過去 10 年間の事故事例」

最後に、本県がこれまで調査研究してきた内容を資料として掲載しています。特に「運動部活動事故に関する判例」と「事故を予見・予防する視点 ～日常に埋め込まれた過失の発見と Reason. J. の安全文化～」は本県研究部の秋元秋代司が長年にわたり研究を重ねているものであり、示唆に富んだものとなっています。

- 「千葉県内の日本医師会認定健康スポーツ医名簿（千葉県医師会提供）」
- 「千葉県高等学校体育連盟加盟実態の推移」
- 「千葉県高等学校体育連盟種目別加盟数の推移」
- 「運動部活動事故に関する判例」
- 「事故を予見・予防する視点 ～日常に埋め込まれた過失の発見と Reason. J. の安全文化～」

これまでの研究活動から、「事故が発生したときに過失とされるような状況が日常的に潜在しており、実際に事故が発生していないため顕在化していないのだということを知っていなければならない。そして、常に事故の予見・予防の視点を持ちながら部活動運営すべきである。」ということを確認しました。この基本概念を伝えるためには、ベテラン指導者の実践経験をより日常の場面に即した形に整理して、具体的事例で表現することが有効と考え編集してきたつもりです。

また、初版となる今回は、財団法人千葉県公立学校教職員互助会の教育文化・スポーツ活動助成事業としての認可を受け4000部を作成することができました。県内全高等学校に各校運動部活動数を配布することができ、現場での安全意識の向上に役立ててもらっています。

さらに、県研究部のHPにアップし、より多くの方の目に触れるようにしています。

5 まとめ

今回「運動部活動サポートブック ―専門外でも怖くない―」の発刊に至るまでには、各専門部との調整に時間がかかりました。本研究の意図を理解してもらうことから始まり、伝えたいことと文章表現との齟齬など第1次原稿から何度もやりとりを繰り返し、各専門部の研究担当者には苦勞をかけた。

実際に調査を行う上で予測はされていたことですが、

(1) 各競技の特性により回答が難しいものがある。

(2) そのこともあって各専門部の回答の濃度差が起こってしまった。

という反省はあります。また、図版や写真を用いることにより、視覚的に分かりやすいものにできればという思いも残りました。

今後は、その活用状況についても追跡調査し、現場での有効活用が促進されるように努めていきたいと考えています。また、サポートブックとしての内容もまだ十分といえませんが、さらに磨きをかけ改訂を重ねていければと思っています。

本誌が、これらの目的達成のために活用され、顧問自身も生徒とともに成長し、日々向上の毎日を送ることが出来るよう願っています。

参考文献：「運動部活動顧問のための安全対策マニュアル」
北海道高等学校体育連盟創立60周年記念事業
北海道高等学校体育連盟

「顧問支援ハンドブック」
宮崎県高等学校体育連盟

「部活動中の重大事故防止のためのガイドライン
～ 日常の活動に潜む危険を予見し回避するための安全対策 ～」
東京都教育委員会 協力 東京都高等学校体育連盟